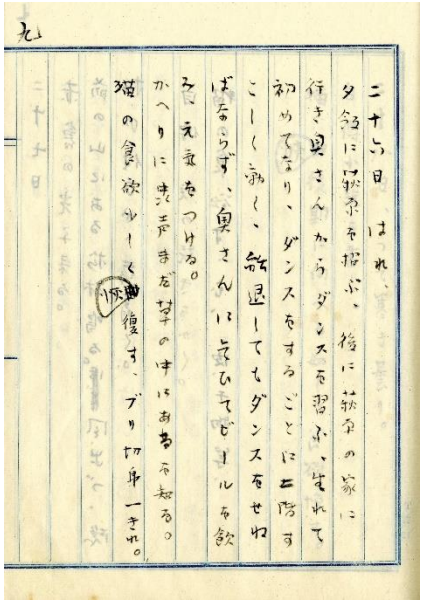
●馬込は笑いに充ちていた

馬込の住人だった榊山潤は、昭和 45（1970）年に出版した小説『馬込文士村』にて馬込で過ごした時代を振り返り「馬込は笑いに充ちていた」と記しました。本作は「馬込文士村」という名の起こりとなった作品です。当時、馬込に居住していた文士たちが実名で登場し、大正末から昭和初期の生活が様々な逸話で紹介されています。同時代に過ごしていたからこそ語れる話が記され、多くの作品を世に残した文士たちの横顔を知ることができる作品となっています。

尾﨑士郎や宇野千代を中心とした文士達の交流は夫妻が馬込を離れる昭和 4～5 年頃までを最盛期とし、その間、馬込の住人たちには親密な交流がみられました。馬込周辺にて当時流行していたダンスやマージャンに興じ、また流行の先進地として発展していた大森駅周辺では映画を鑑賞したり食事や買い物をしたりする様子が文士の日記や小説・随筆のなかに記されています。



二十六日　はれ、
夕飯に萩原を招ぶ、後に萩原の家に
行き奥さんからダンスを習ふ、生れて
初めてなり、ダンスをするごとに二階す
こしく動く、絵退してもダンスをせね
ばならず、奥さんにそひてビールを飲
み、元気をつける。
かへりに先声まだ草の中にあるを知る。
猫の食欲少しく恢復す、ブリ切身一きれ。

室生犀星「馬込日記」昭和３年 11 月 26 日
犀星が萩原朔太郎の妻・稲子に誘われて初めてダンスに挑戦した日の事が記されています。

大森駅構内　昭和 12 年 12 月
都心へのアクセスが容易な場所として馬込の文士や画家は日常的に大森駅を利用していました。